

アトリエ 琉游舎 だより 181号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/

2024年6月19日発行

琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mvsite-3>

玉葱をつりても梅雨に入りにつけり



久保田万太郎

- タマネギの首折れが始まって1週間くらいが収穫時期です。上にまっすぐ伸びていたタマネギの茎が地面に倒れ込んでからも、地下のタマネギ自身は大きくなるので、少し経ってからの収穫です。収穫後は二つずつ紐で結んで風通しの良い軒下にぶら下げて乾かします。この時期は梅雨にあたるので雨に当たらないようしっかり乾燥させれば、長期保存が出来ます。
- 去年の11月に植えた苗が約八ヶ月たってやっと食べられるようになりました。種から苗を育てるまでさらに二ヶ月はかかるので、十ヶ月間大地と太陽の栄養をたっぷり吸収して育ち、栄養も豊富です。私はみずみずしい新タマネギよりも、どちらかといえば暫く時が経ってからのタマネギの方が好みです。よく分かりませんが寝かせることで熟成するのでしょうか。
- 温度管理で早生や促成栽培の収穫時期が調整できるようになってから、野菜は一年中店頭で並ぶようになりました。冬にキュウリやトマトの夏野菜がないのは当たり前のはずだったのに、今私たちは一年中食べられないと不満を覚えることでしょう。これまでなかったものが技術などの進歩でいつでも手に入って便利になると、逆にそれが何かの拍子に失われることになれば、大変な不便と不満を覚えてしまうことは文明進化の副作用なのかもしれません。
- スマホは今、生活には必要不可欠のものです。一般家庭に固定電話もなかった時代から半世紀、スマホは携帯コンピュータとなって、いつでもどこでもあらゆる情報にアクセスが可能となりました。しかし同時に悪意を持った他人からの私へのアクセスも可能になったのです。個人情報漏洩や情報操作や詐欺などの犯罪にさらされるリスクも特段に増えました。外部からのリスクがあっても今さらスマホを失うことはできません。便利は危険と表裏一体なのかもしれません。便利が不便、快適が不快にいつでも変わり得ることが進化の結果だとするならば、少し文明が後退してもいいかなと玉ねぎを吊るしながら思っているところです。

6月・7月スケジュール

月			木	金	土	日
			20 映画会 お休み	21	22	23
24	25 読書会 13時半から	26	27 映画会 13時半から	28	29	30
7月1日	2	3	4 映画会 お休み	5	6	7
8	9 読書会 13時半から	10	11 映画会 13時半から	12	13	14 写経会 13時半から
15	16	17	18 映画会 お休み	19	20	21

読書会

6/25・7/9
(火) 13時半

写経会

7/14 (日)
13時半

映画会

6/27・7/11
(木) 13時半

ここには野生の生き物がたくさん住んでいます。彼らは常に生命の危険と背中合わせが日常ですから、最強ハンターである人前にはうかつに姿を晒しはしません。鼯、狸、兎、鹿、猪、猿、青大将、蝮などを目撃した話をよく聞きます。私もこれらの生き物は車の運転や散歩の時、雪の翌日に見たことのない足跡を見つけて調べるとある野生動物だったり、熊以外はどこかで何らかの形で遭遇しています。しかし彼らを目撃できるのは一瞬で、カメラで捉えようとするまもなく隠れ去って行きます。地上で生きる野生動物は天敵に視認されることが最大の危機なので大半の生き物の行動は夜間のはずです。夜と昼と活動範囲が異なっているので、人と野生動物の予期せぬ衝突は回避されているのでしょう。昼間に活動する生き物は鷺や川鶉や鴨の水鳥と空を飛ぶ鳥くらいです。彼らは水や空中や木の上にいるので人の手は届きません。彼らなりに人との間合いを計っているのか、例えばわたしが水辺に近づくそぶりを見せただけで、飛び去っていきます。

闇雲に恐れることも排除することも殊更に互いを意識することもなく、ごく自然にあるがままに共存できていることが他者との共棲ではないでしょうか。人間の生活領域を侵犯するときは人も彼らを駆逐する必要があるでしょうが、理由なく侵犯することはないはずです。お互いの生存領域を犯さない限りはたまに粗忽な猪が人前に現れることもあるでしょう。猪が道を横切ったくらいで危険だからなんとかして欲しいと大騒ぎする人間を見て、当の猪は「ミスったな、これでまたそこかしこに罠を仕掛けられてしまう。」と反省しているかどうかは分かりませんが、人間が猪を恐ろしいように、猪も人間が怖いはずです。猪に反省があるならば、人間にはどんな反省があるでしょう。持続的な共棲のためには人の側にも省察が必要なはずです。

わたしの家の庭を我が物顔で歩く猫を野生動物と呼ぶことはふさわしくないでしょう。野良猫は野生でもなく飼われているわけでもない中途半端な立場です。だからというわけでもないでしょうが、野良猫は日中も人前に姿を晒し、逃げることもなく、にらめっここの体でこちらの様子をうかがい、危険がないと分かるとまた悠々と庭の中を気ままに歩き回ります。野良猫に餌をやっている人をよく見かけます。餌をやることはその猫を保護していることになるので飼い主としてその猫に責任を持たなければならないでしょう。それは猫自身だけでなく、回りに住む人々に対する責任でもあるはずです。例えばむやみに子供を産ませないように避妊手術をさせる、よその庭を荒らしたり糞をさせない、自分の敷地内で飼うなどは、餌をやる人の最低限の責任だと思います。一度野良猫の餌やりについて注意喚起をしたところ「猫は家の中では生きられずまた餌をやらないと死んでしまう生き物なので、こうやって餌をやっている。飼っているわけではない」と言われて唾然としたことがあります。可愛いから、可哀想だからと自分がそう思った自己都合で餌をやっていると聞こえてしまいます。人が保護してあげるといふ動物支配の傲慢さがわたしには見えてしまいます。これを動物愛護と称するならば、それはわたしの考える他者（万物）との共棲とは大きく異なる方法です。

定期的に関いている無量寿経の読書会で無量寿仏（アミターズ・阿弥陀仏）の普く世界を照らす「光」がテーマとなりました。この光を違う言葉に言い換えてみると、例えば仏のはたらき、はからい、宇宙そのもの、仏の慈悲、ありのままの世界を照らす光などです。仏は全ての衆生に「光」を注ぎ照らしているのです。ここで誤ってはいけないことは人間だけに注ぐ光ではないということです。宇宙に存在する生きとし生けるもの（衆生）を含めた万物を照らす光が仏の「光」です。つまりありのままの宇宙、ありのままに万物そのものを照らし出す光なのです。その光は受け取る受け取らないに関わらず、照らし続ける「光」です。だから常住不滅、宇宙そのものなのです。これが「仏」です。仏の照らす「光」を私たちが受け取ることは、わたしと他者（私の内と外）が無限の動因（縁起の法則）の流れにありのままの私を委ねる瞬間、つまり

「信」への無垢無礙の帰依です。無量寿経ではそれを南無阿弥陀仏と呼び、法華経では南無妙法蓮華経と呼びます。二つの経には図らずも仏の無限の光が普く三千大世界（宇宙）を照らすことが同じように説かれています。私たちはだれでもその光を等しく受け取ることが出来ます。野生の動物や飼い犬野良猫にも、雑草や枯れ木、岩にも海にも、人にもそそがれている仏の光を私たちが受け取ることが出来るのです。そしてこれを受容したとき初めて仏の光は私たち万物を照らす光となります。この受容を「信」と名付けるのです。

読書会で「仏の光は等しくパレスチナの子供たちにも注がれているだろうか」との疑問が出されました。もちろん注がれています。しかしその光が彼らに注がれているということを経験しなくてはならないでしょう。仏の光を受け取るとことは私と仏（内と外）が互いに共鳴し合い大いなる宇宙と一体となることです。私に仏が、仏に私が入る相互悟入の瞬間です。私と他者が交響し私が仏になり仏が私になる瞬間です。「信」が仏の光を私たちが受容することを可能にしているのです。仏教以外の宗教を信じる人たちは私が仏の光と称するこの光を受け取ることは出来ないと思われるかも知れません。私はこの光を仏の光と表現していますがその光を発する源（大いなるもののはからい）を私は「仏の光」と呼んでいるだけに過ぎません。各々が自分の信じる「信」にしたがってその光のはからいを受け取れば良いのです。その光は各々の「信」を選ばず普く万物に平等に注がれる光だからです。但しその光は自分の信じる宗教や民族や特定の神を信じる人たちにしか注がないと考える人たちには、その光は届かないにちがいません。

仏の光は万物に注ぎます。野生の生き物や野良猫や私の隣人にも等しく普く注いでいるのです。それを各々が受け取りあるがままの日々を生きていくことが仏のはからいに生きることです。人が他者の日々をはからうものではありません。仏のはからいそのままに生きることが他者と共棲して生きることでもあるのです。